

# 小説文読解のための道具

今回は小説文の読解について説明します。

小説では、登場人物の「感情」が問題になることがほとんどで、以下に説明する内容の全ては、その「感情」を把握するための道具といえます。覚えることは評論文ほど多くありません。下に色々書いてありますが、話を聞けば「まあたしかにそうだよな」となることばかりだと思います。

ただ、読んで理解できることと、実際に使えることは全くの別物です。説明を聞きつつ「友達に説明できるレベル」で理解するようにしてください^^

## 感情を把握

以下に例示する感情表現を見つけたら、片っ端から線を引いていきます。

### 1. 直接

「太郎は怒った」「加奈子は嬉しそうだった」など、一番わかりやすいパターンです。

### 2. 表情・態度

「父は怪訝な顔をしていた」「先生のニコニコした表情が忘れられない」などです。その表情がどんな感情を表すものなのかをある程度知っている必要があります（怪訝とか、屈託のない笑いとか）。

### 3. 動作

「ドンと机を叩いた」「握りしめた拳がプルプルと震えていた」など。これも、その動作がどんな感情を示しているのかをある程度知っている必要があります。つまり語彙力です。

### 4. 情景

これはちょっと扱いが難しいです。「どんよりとした曇り空だった」「雲ひとつない秋晴れだった」など、天気やその場の雰囲気が登場人物の感情を理解する”ヒント”になっているパターンです。

ヒントと書いたのは、必ずしも「情景＝登場人物の感情」とはならないパターンが存在するため、この「情景」については、ひとまず頭に入れておく程度で構いません。

## ★プラスマイナス

感情表現を見つけたら、そのプラスマイナスを考えるようにしてみましょう。「嬉しい」だったらプラスです、「悲しい」だったらマイナスです。「ガタンと扉を乱暴に閉めた」はマイナスの可能性が高いです。では、「泣き出した」はどちらでしょう？

## 登場人物を把握

新しく登場人物が出てきたら、その都度□で囲ってチェックします。すでに登場している人が別の呼称で呼ばれていたら（あだ名とか）、それもチェックします。

普通の文章なら困ることはまずないのですが、まれに登場人物が 8 人位出てきて困ることがあります。登場人物をチェックする習慣は持っていて良いと思います。

## 場面転換を把握

場面転換とは、簡単に言えばシーンの切り替わりのことです。小説文の問題は基本的に場面ごとに解いていくので、この場面転換を把握することによって、「ここで場面転換をしているから、問3はここまでの情報で解けるはずだ」とアタリをつけることができます。

で、具体的にはどんな場面転換があるのか？というのを以下で説明しています。

### 1. 時間が経つ

朝の家族の食事のシーンと、昼前に主婦が家事をしているシーンでは、同じ部屋でも場面が転換しています。よって、そこで行われるやり取りも当然変わってきます。

### 2. 場所が変わる

放課後、学校の教室にいるシーンと帰り道のシーンとでは、これまた場面転換が行われています。

### 3. 登場人物が増減する

例えば友人 3 人と話していたところにもうひとり増えて 4 人になると、それまで行われていた会話や各人の様子に若干の変化が生じます。つまり場面転換が行われていると判断します。

## + α 原因と結果

よくある問題パターンとして「どんな気持ちか？」と「なぜその気持ちになったのか？」というものがあります。これらの問題を解く際に非常に役立つ（というかマストな）考え方が原因と結果です。

問われている感情が「生じた原因はなにか？」そして「その感情の結果どうなったか？」の 2 点を意識するようにすると、正答率がグンと上がります。